

令和元年6月13日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02662

研究課題名(和文) 朝鮮語漢文訓読系統論の探索

研究課題名(英文) A study of the systematics of Korean Hanmun Hundok

研究代表者

上保 敏 (JOHO, Satoshi)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：80553114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、朝鮮語漢文訓読資料の読法が、資料間でどのような関係にあるのか、また、どのように継承されているか(あるいは、されていないか)という点について考察し、朝鮮語漢文訓読系統論を新たに構築することを目的とした。その結果、より巨視的な観点から見た場合、少なくとも2つのやや異なる漢文訓読の系統が存在すること、さらにその2つの系統のうち、1つは朝鮮語漢文訓読史にあってごく一般的な系統であり、もう1つは15世紀中葉の仏教系集団に固有のより個別的な系統と看做し得る点についても論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、朝鮮半島でかつて行われていた漢文訓読に対し、それぞれの資料間の関係を考察し、読法がどのように系統付けられるかを考察した点で意義があるものである。特に、より巨視的な観点から見た場合、少なくとも2つのやや異なる漢文訓読の系統が存在していたという点を論じたことは、もっぱら本研究代表者の独創的な観点である。一方、漢文訓読が東アジア漢字文化圏に広く存在したものであるだけに、その1つのあり方を朝鮮語の例を以って示し得た点で、広く国際的な観点からの漢文訓読研究にも一助を与え得ると言うことができよう。

研究成果の概要(英文)：In this study, I attempted to research what kind of relationship about the reading methods exists between Korean Hanmun Hundok(漢文訓読) materials, and how has been taken over. And, I attempted to build a hypothesis about the systematics of Korean Hanmun Hundok(漢文訓読).

As a result, it became clear that at least the two different Hanmun Hundok(漢文訓読) systems existed from the macroscopic viewpoint. And it can be considered that one was the general system of the history of Korean Hanmun Hundok(漢文訓読), and another was the specific system among the Buddhist group in the mid-15th century.

研究分野：朝鮮語学

キーワード：朝鮮語学 漢文訓読

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 朝鮮半島における漢文訓読資料(積読口訣資料)と研究現況

漢文訓読は、日本でのみ行われていたのではなく、東アジア地域に広く存在した言語活動であった。朝鮮半島も例外でなく、1973年の『旧訳仁王経』の発見以降、高麗時代のものと信じられる朝鮮語漢文訓読資料(積読口訣資料と呼ぶ)として主要なものが5種ほど発見されている。さらに2000年には、角筆によるいわゆるヲコト点漢文訓読資料(点吐口訣資料と呼ぶ)も発見され、この方面の研究はますます活発に為されているところである。

この間、内外の研究によって、積読口訣資料の解読方案が示されているが、その過程において、資料ごとに訓読の様相がやや異なる傾向を見せていることが指摘されてきた。

(2) ハングル資料(諺解資料)との関係

これに対して、本研究代表者は、積読口訣資料と15世紀以降のハングル資料との関係について、一貫して追求してきた。15世紀中葉のハングル創制以後、数多くの文献がこの新文字によって記録されたが、その大部分が諺解資料と呼ばれるものである。諺解資料とは、主として仏教や儒教の経典等、漢文を朝鮮語に翻訳した翻訳資料にあたるものであるが、漢文原文の句読を切った文(口訣文と呼ぶ)とその朝鮮語翻訳文(諺解文と呼ぶ)が常に併記される様式が原則である。すなわち、本研究代表者は、これら諺解資料における諺解文に対し、漢文訓読の結果による書き下し文と見なす、という観点を導入することにより、漢文訓読のさまざまな訓法を、諺解資料をもとに再構する研究を執り行ってきた。

2. 研究の目的

こうした状況をふまえ、本研究では、朝鮮語漢文訓読資料の読法が、各資料間でどのような関係にあるのか、また、どのように継承されているか(あるいは、されていないか)と言う点について、系統という観点から考察し、朝鮮語漢文訓読系統論を新たに構築することを目的とする。その際、近年の内外の研究で論じられつつある積読口訣資料の各資料間の系統論を検証すると同時に、本研究代表者の独自の観点である積読口訣資料と15世紀以降のハングル資料との関係について、とりわけ注目をすることにする。

3. 研究の方法

上記の目的のために、本研究では以下の3点について、年次ごとに計画的に実施する。

(1) 高麗時代の漢文訓読資料(積読口訣資料)の各資料の間の系統論

近年の内外の研究で論じられつつある各資料間の系統論を検証すると同時に、本研究代表者がこれまでに実施してきた積読口訣資料のデータ、索引、そして解読作業を発展させ、各資料間の訓法の異同を検討する。

(2) 15世紀以降のハングル資料(諺解資料)との間の系統論

本研究代表者は、これまで積読口訣資料の読法の解明に果たすハングル資料の重要性について強く認識し、一貫して15世紀以降のハングル資料の様相をもとにした積読口訣資料の読法の分析を推し進めてきたが、ハングル資料といえども、種々の資料が存在する。本研究期間には、新たな系統論の構築のために、それら種々の資料の読法について検討する。

(3) 朝鮮語漢文訓読系統論

上記の(1)と(2)をつきあわせ、朝鮮語漢文訓読系統論を新たに構築する。こうした視点からの系統論は、従来の内外の朝鮮語学の研究で為されたことがなく、もっぱら本研究代表者の独創的なものである。それ故、この作業は、日本語の漢文訓読研究の研究成果等についても適宜参照しながら執り行う。

なお、考察にあたっては、コンピュータソフトウェアの活用、原本調査の実施、研究情報の交換、研究図書参照等をもって、多角的に執り行う。

4. 研究成果

本研究では、朝鮮語漢文訓読の系統について、上述の2つの観点を微視的な系統論と巨視的な系統論に分けて論じた。

(1) 微視的な系統論

微視的な系統論は、高麗時代の漢文訓読資料(積読口訣資料)における懸吐の特徴およびその読法について考察する際に、資料を華嚴経系統と非華嚴経(≒瑜伽師地論)系統に分けて系統立てをする観点であり、実際、近年の朝鮮語史研究でも注意を引いているものである。ある場合には、華嚴経系統(『(新訳)華嚴経』と『(新訳)華嚴経疏』)と『瑜伽師地論』とを対立させ捉え

たりもし、またある場合には、華嚴經系統(『(新訳)華嚴經』と『(新訳)華嚴經疏』)と華嚴經以外の3種(『旧訳仁王經』、『瑜伽師地論』、『合部金光明經』)を非華嚴經系統として対立させ捉えたりもしている。さらには、角筆による釈読口訣資料(点吐口訣資料)の解説に際しても、こうした考え方が積極的に援用されている。すべて、仏教系の資料である5種の資料について、さらに細分化して扱っているため、微視的な系統論と行うことができよう。

このように、資料に施された訓法の違いが、その訓点を記入した人物の属する学派、宗派、流派の相違に対応する、と位置付けるような研究は、日本語の漢文訓読研究で広く行われてきたものである。ただし、日本の場合と著しく異なるのは、同一資料の対する複数の派による加点に基づいた系統論を行っているのではなく、資料それ自体の性格を分類し、資料単位で系統立てを行っている点である。残存する資料が著しく乏しいと言う、事情を異にするためでもあるが、いずれにしても、日本における系統論とは、やや趣を異にする系統論であると言えるだろう。

また、こうした系統論に必ずしも合致しない例もあり、従来の系統論が必ずしも万全なものではない点は、認めざるをえないだろう。もっとも、角筆による漢文訓読資料において、華嚴經系統と瑜伽師地論とは完全に異なる点図が想定される点などを考慮するならば、その系統論は全く否定されるべきものではないと思われるが、微視的な系統論である故、諸現象ごとに慎重に接近する必要があるように思われる。ここでは、その是非については、これ以上の言及を避けておくこととする。

(2) 巨視的な系統論

一方、巨視的な系統論は、高麗時代から李朝時代を通じて、より大きな観点からその関係を検討するものであり、本研究で新たに打ち立てるものである。すなわち、高麗時代の釈読口訣資料の読法が中期朝鮮語資料にどのように継承されているか(あるいは、されていないか)と言う点について、この系統という観点である。その際、中期朝鮮語資料としてとりわけ重視するのは、諺解資料である。

ここでは特に、諺解資料に現れる諺解文を漢文訓読の結果を記したいわば書き下し文のようなものとみなし、これをもとにして、当時の漢文訓読のあり方を再考しようとする考えに立つ。これは、以下のような論に基づくものである。

- ①漢文訓読は東アジアの漢字文化圏において広く行われてきた言語活動である。[小助川貞次(2009, 2010)など]
- ②朝鮮における漢文の読法としては、音読と訓読が共に古来より行われてきた。[小倉進平(1934)など]
- ③朝鮮では、音読と訓読が漢文学習の必須条件であった。[安秉禧(1976)]
- ④また、その順序は、音読をした後に訓読をすると言った順序で常に一貫していた。
- ⑤諺解資料におけるハングル口訣文と諺解文は、古来より行われてきた漢文の音読と訓読の慣習がそれぞれ投射されたものである。
- ⑥諺解資料における諺解文は漢文訓読の結果としての書き下し文に該当するものと見なし得る。[菅野裕臣(1996), 오미영(2004: 33)]

このような論を経て、諺解資料における諺解文を漢文訓読の結果が記されたいわば書き下し文として扱うのであるが、これはさらに、以下のような考えに基づいている。

- ①漢文訓読の伝統が15世紀中葉の訓民正音創制以後の諺解資料に継承されているだろう。
- ②これらの資料を通じて、漢文訓読史を時代的な連続性の中で検討すべきであろう。
- ③その点において、釈読口訣資料の読法に推定において、諺解資料がよりいっそう重視されるべきであろう。

ところが、調査をはじめて見ると、上述のことがらは、さほど単純でないことがわかった。それは、以下のような2つの様相を見せる例が存在するためである。

- ①同一の漢字に対し、高麗時代の釈読口訣資料の読法が15世紀の訓民正音創制以降の諺解資料、さらには16世紀以降においても、一貫して同一の語形が見られる例
- ②同一の漢字に対し、高麗時代の釈読口訣資料と15世紀末期以降の非仏教系(儒教系)の諺解資料とで共通した読法を見せるのに対して、15世紀中葉の仏教系の諺解資料にはこれとは異なる読法を見せる例

②のような例が存在する点からすると、巨視的な観点から見ると、朝鮮語漢文訓読史において、少なくとも2種の異なる系統が存在していたであろうと考えることができる。すなわち、高麗時代の釈読口訣資料と15世紀末期以降の非仏教系(儒教系)の諺解資料とで共通した読法を見せる系統と、15世紀中葉の仏教系の諺解資料に見られる系統である。それを仮に「系統1」・「系統2」と名づけるならば、いささか簡素ながら、以下のように図示することができるであろう。

系統1は、高麗時代から15世紀末期以降へと連なっていく漢文訓読の系統であるが、この系統は15世紀中葉には、資料不伝によるためか、表面上現れていないものである。

それに対して、系統2は、もっぱら15世紀中葉の仏教系の資料に見られる系統であるが、その前後の時代には現れておらず、

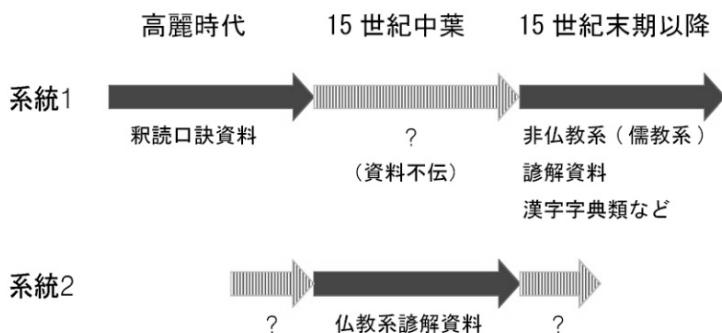
その様相は確認することができないものである。言い換えるならば、高麗時代の積読口訣資料に見られる漢文訓読の系統は、15世紀末期以降の非仏教系(儒教系)の諺解資料に継承されており、また、この系統は、15世紀中葉の仏教系の諺解資料におけるそれとはいくらか異なっていたであろうと判断するものである。

ただし、こうした系統立てには、腑に落ちない点もある。何よりも、高麗時代の積読口訣資料がすべて仏教系資料であるのに、なぜそこに見られる読法が、時代的な連続性がある15世紀中葉の仏教系の諺解資料に継承されていないのか、と言う点である。さらにその系統が、15世紀中葉を飛び越えて、15世紀末期以降の非仏教系の諺解資料に継承されていると言うのも、なかなか首肯し難い点もある。

こうした疑問点を解決するためには、非言語的な側面に対する検討も必要であろうが、今ここで追求する余裕はないため、今後の課題としておさざるを得ない。ただし、1つ考えられるのは、系統1に関しては、仏教系・非仏教系と言った宗派による固有な読法であると言うよりは、朝鮮語漢文訓読史において、ごく一般的な漢文訓読の系統であったと見ることができるのではないかと、言う点である。このように見るのであれば、系統2のほうが、15世紀中葉の仏教系集団に固有のより個別的な系統であった、と見ることも可能になるであろう。

こうした主張がより確固たる裏付けを持つためには、より多くの用例に対する検討が必須である点と言うまでもない。また、従来行われてきたような観点とも、合わせて検討して行く必要があろう。

いずれにしても最後に1つ押さえておくべき点として、積読口訣資料の読法の推定にあっては、とりわけ、15世紀末期以降の非仏教系の諺解資料が重要な位置をしめている、と言う点は、強調しておきたいと思う。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

①上保 敏 (2019) 「朝鮮語漢文訓読の2つの系統論」『富山大学人文学部紀要』71, 富山大学人文学部 (査読無)

〔学会発表〕(計 3件)

①上保 敏 (2019) 『한국어 한문훈독 계통론 시론(朝鮮語漢文訓読系統論試論)』2019年ソウル大学校韓国語文学研究所国際学術会議, 於 韓国ソウル大学校, 2019年1月7~8日 (招待講演) (国際学会)

②上保 敏 (2018) 『朝鮮語漢文訓読系統論の試み』第2回駒場日韓対照研究会, 於 東京大学駒場キャンパス, 2018年3月7日

③JOHO, Satoshi. 2017. *Relationship between Söktok Kugyöl materials and Ōnhæ materials*. The 20th Meeting of the International Circle of Korean Linguistics. University of Helsinki, Finland. 2017年6月27~29日 (国際学会)

〔図書〕(計 1件)

①上保 敏 (2019) 『積読口訣資料漢文原文 KWIC 索引』富山大学人文学部朝鮮言語文化研究室, 全524ページ

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。